
とある妹達の憑依物語

鳥天狗0713

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある妹達の憑依物語

【NZコード】

N2298S

【作者名】

鳥天狗0713

【あらすじ】

神の手違いか、それともお遊びか、

少年は、死んで「とある魔術の禁書目録」の世界へといった。

彼は、妹達の一人に憑依した。

彼女の運命は何処へと向かうのだろうか

作者は、ド素人の超駄文です。期待に沿ることができないかも

しませんが、

皆様が楽しめる物語を書いひとつと思います。

感想おまかしておつます。

追記：学校が忙しいので、更新が遅くなると思います。

追記2：7話 紅を一度削除致しました。

PROLOG（前書き）

最初は、妹達の一人になる少年のプロローグです。
馱文ですが、よろしくお願いします。

PROLOG

季節は、春。

天気は、晴天。

俺は、高橋 優（たかはし ゆう）

3月に中学校卒業し、春休みを満喫している。

今日は、小学校へ今年入学することになりた高橋美晴と
家の近くにある公園に繰出した。

美晴は、大人になつたら絶対、美人になる可愛いらしい顔と白い
ワンピース。

そんな彼女は、俺のとなりにいる。

じつに可愛らしい。うん、将来が楽しみだ。

皆さんは、勘違いしているだろうが、シスコンではない。決して、
シスコンではない！！（嘘だ！！！）作者

普通の妹のお兄さんとして心配しているのだ。うん。

「おにいちゃん、どうしたの？ はやくこいつよー。」

考え事をしていたら、こつのまにかすこし先にいた美晴が、
俺を呼んでいる。

ああ、と美晴に返事をしながら、美晴のとなりまでこしづぶ。

「どうどう、美晴も小学生か…、はやいものだな～。」

「あはは、パパみたい～。」

「そりか～？ 親父みたいになりたくないなあ～…」

お兄ちやんは、と続けようとした時、

ふと、少し先でこちらの反対側の歩道から、美晴よりちいさな歳の子が、道路へと飛び出していた。

(あ、危なそうだな。一応、声をかけておこう)

声をかけようとした時、その奥から車が物凄い速度での子のところへ向かってきている。事態は急変！

俺は、全速力での子のところに、駆けていく。前にいる人を押しのけ、無心で走る。あの子に届く瞬間足がもつれたそうになつたが、何とか立ち直し、あの子を歩道に突き飛ばす。

その瞬間、
体に強い衝撃が、俺を襲つた。

PROLOG (後書き)

感想をお願いします。

主人公1の紹介

【名前】 高橋 優 ミサカ10039号 ユウと名乗る

【性別】 男性

【年齢】 15歳

女性

1歳?

【身長】 178cm

161cm

【体重】 60kg

45kg

【顔立ち】

中の上ぐらいいの幼い感じを残す顔

他の妹達と同じ顔

【髪型】

後ろ髪を軽く束ねている

【性格】

自分より自分の周りの人を優先する、世話好き

【好きなもの】

読書、料理、子供

【嫌いなもの】

虫、私欲塗れの人、自分のことしか考えない人

【詳細】

車に轢かれそうな子供を助け、命を落としたが、なぜかミサカ 10039号に憑依していた。

憑依時は、原作3巻の八月。

ミサカネットワークには、脳波がちがつため不可能。彼女の欠陥電気は、レベル3。

それ以外は、他の妹達と変わらない。

原作知識なし、第一、ライトノベルやアニメなどをあまり見ない。

元の世界の家族構成は、両親と妹の4人家族。

主人公1の紹介（後書き）

設定でおかしい点があれば、ご報告いただけますとありがとうございます。

1話 学園都市（前書き）

もう一人の主人公は、一方通行編が終わってからです。
とりあえず、お楽しみください。

暑い。

蒸し暑さで俺は、目覚める。

太陽の光が眩しい。

眩しさで目を開けにくいやが、

場所を確認するため、目を頑張って開けてみると、
そこに広がっているのは…縁。

木々がすこし並んでおり、涼しさを感じじることができるが、
今、俺がいるところは、レンガの道にあるベンチに座っている。

(あれ、なんでこんなとこひどいっていうか、暑くね?)

おかしいのだ、最近の地球は、温暖化が進んでいるが、
春でこんな蒸し暑いはずがないのに、
夏の真っ盛りの暑さを俺は感じている。

どういうことだろうか?

第一、こんな場所など来たこともないし、
遊びに行つたことがない。

もうひとつ、少量の木々の向こうに広がるビルの数々が見える。
俺が住んでいるところは、こんな都会のところではなく、
ベットタウンのはずだ。

なのに、なぜ?

いや、そのまえに、俺は生きているのか?

あの子を助けるため、車に轢かれたはずでは?
俺が生きているとしても、おかしい。

あの衝撃は、多分轢かれたからである。

なのに、公園のベンチに放置?

周りに人がいたはず…ありえない。

まず、俺は、体のどこからも違和感を感じない。

(ん?いや、あるところがないかんじがする…)

そつと、違和感を感じるとぐくと、手を伸ばすと…

…その先には、灰色のスカートひしきものがあった。

「…はあ？ なこれ？」

俺にそういう性癖などない。

ここは、男がスカートを穿く国でもないと思つ。なら、なぜ？隠れた性癖か？ありえない。

とりあえず、その先の違和感を確かめよう。

俺は、スカートの上からそつと、違和感を感じるとぐくと手を置いた。

(あれ？まさか…)

ない。

男として、あるべきものがない。

ありえない。

ありえない、ありえない、ありえない。

「はあ…どうしたことだこれ…？」

よく見ると、俺の服装は、女学生そのものの格好である。半そでのブラウスにサマーセーター、灰色のスカートを着ている。

「事故ったせいで、性転換ですか！？意味わかんねえし…」

落ち着きを取り戻せない。

ふざけている、こんな夢だ、幻想だ。

そうだ、そうに違いない。

俺は、そう思いたかった。

だが、現実は、そつ抜くはできていないうらしく…

夢と確認するため、皆がするであろう、頬をつねるところ行為をした。

痛みを感じないはず、そうに違いない。

この暑さも、単純に死に掛けているだけの暑さだ。

(いや、待て待て！死に掛けって、不吉なことは何やめといつ)

それでは、自分が生きる可能性を失う。

今は、とりあえず、頬を抓ろう。

(頬をもって、最大限、抓る…)

俺は、思いつき頬を抓った。

そして…

「 いってえ、嘘だろ？これが現実なんて！？」

頬に激痛が走った。痛かった。

痛みを感じるということは、夢ではない？

死後の世界でもない？

生きている？

(…ふう、落ち着け俺。)

単純に性転換しただけで、顔などは、なぜか変わっていることないだろ？。

その前に、必要があつたかは分からないが…
とりあえず、生きていることに感謝しそう。これで、家族にも会えるのだろう。

友達たちとも会えるだろ？。

生きている。それだけで十分であろう。
そう切りかえるととりあえず、場所を確かめるため、近くの人間に聞こえ。

(田標は…)

確認するため、ベンチから立とうとするときには気がついた。
俺が座っていたとなりに、ゴーグルらしきものがあった。
ゴーグルといつても、軍用みたい感じボディである。それが、
おれのとなりにある。

どうしようかと考えたが、誰かの落し物かと考えていたが、

(落し物にしては、これはないだろ？…)

さすがにこんな大きいものを頭に着けて持ち歩いたりしないであら。

なんとなぐ、もらつておくことにした。

誰からのプレゼントだったのかもしれないからである。
もちろん、俺の向けての。

ゴーグルを左手に持つて、ベンチを立つ。

こじらへんを回つておくか、それとも、すこし移動するか、と迷つたが、

待っていても、暑いだけなので、少し移動しようとしました。

歩いている途中、青髪のピアスをした高校生らしこの兄さんと出会った。

(大きいなあ、180ぐらい?)

「ううん、じいがじいかと聞いりつと話しかけてみる。

「あのー、すいません。ちょっと聞きたいことがあります…」

「うそっ! お嬢ちゃん、ボクになんかようつかあ?」

なんか、笑顔になつてゐ。

最初、すこし怪しかつたけど、優しいお兄さんでよかつた。

「その…迷つてしまつて、じいがじいが分からんんです。」

安心して、優しいお兄さんに聞いた。

「あら、迷子さんかいなあ…うん、ボクに任せといてえ。
じいはな、第七学区にある公園なんやでえ。名前、忘れた
けど。」

分からぬ。

それだけじゃ、じいがじいかわからぬ。

「あの、第七巡回って、何のじですか？」

「あいや、おやか君、学園都市来よつたばかりなん?せやから、迷つたんかあ、

ふふふ、お兄さんこまかせときこ~。」

なんだかよく分からぬが、とつあえず、お兄さんこころの助けてもらおつ。

1話 学園都市（後書き）

結論・青髪ピアスの喋り方難しい。

青髪君が予想以上に難しかった。似非関西弁難しい。

おかしな点などあつたら、ご報告いただけるとありがとうございます。
感想お待ちしております。

・追記

すこし、青髪君の台詞を直しました。

2話 第七学区 前篇（前書き）

短めです。

ついあえず、投稿しておきました。

s.i.d.e 青髪ピアス

暇や。

しかも、暑い。

もう帰らうかいな？歩いとつても意味ないし。

(いやいや、素敵な出会いがボクを待つともかもしねへん！頑張ろ
(う)

いや、でも…とボクの頭の中で、もうひとつ自分の自分と論議していると、

「あの～、すみません。ちょっと聞きたいことがあって…」

一人の可愛い女の子が話しかけてきた。
なんと、ボクにもフラグが来よった！

(かみやんだけかと思つていたけど、ボクも、春がきたんやー！)

そう考えるだけで嬉しくなってきた。

女の子の姿は、短髪に切つた茶髪に半そでのブラウス、その上に
サマーセーターを着ていて、灰色のプリーツスカートを穿いていた。

(あら、常盤台中の娘かいなあ。まあ、関係あらへんけどねー！)

女の子の顔は、ちよつと困っている顔をしてこる。

その顔は、一般的な女の子に比べて、可愛らしく整っている顔。

(「ここまで、たつたの〇・5秒。なんとはやいりょ作者）

ボクは、自然体に、なおかつ、怖がられないような笑顔をして、

返事をした。

「うん? どしたんお嬢ちゃん、ボクになんかようかあ?」

「その…迷つてしまつて、ここがどこか分からないんです。」

それは、大変だ。

確かに常盤台中の寮つて、結構厳しつて聴いてあるけど…

うん、ボクが助けてあげよう。

そうすれば、勝ち組の階段を登れるかもしねへん!-

「あら、迷子さんかいなあ…うん、ボクに任せといてえ。

「ここはな、第七学区にある公園なんやで。名前、わすれた
けど。」

女の子は、まだ困つた顔している。

(あれ、どうしたのやうう?)

第七学区つて言えれば、多分大丈夫やろ?と思つたけど…
まさか…

「あの、第七学区つて、何のことですか?」

やつぱり、学園都市に来たばかりの娘かいな。

「ここは、第七学区について教えていたほうが好感度があがるやろ
うな。

「あ、や、まわか君、学園都市に来ようぜたばかりなん? セやから、
迷つたんかあ、

ふふふ お兄ちゃんにまかせとや〜。」

よし、これでボクも、勝ち組の階段を登れる! - - .

S.t.d e end

2話 第七学区 前篇（後書き）

関西弁が難しいので、
関西弁に変換しても「ひつじ」ができるサイトを
多用させていただいている。

感想お待ちしております。

3話 第七回 中篇（繪書也）

なんかおかしいかもしだれませんが、
お楽しみください。

side ゴウ

助かつた。

公園で、出会った優しいお兄さんは、青髪ピアスとこいつらしい。何故か名前を教えてもらえなかつた。何でだらう？

よくわからないけど、気にしないでおいひつ。次から、優しくお兄さんのことを青髪をさつて呼ぶことにしようと思つ。

青髪さんは、ちょっと不自然だけど、優しい笑顔でこいついろ教えてくれてる。

青髪さんの話をまとめると、

- ・「これは、学園都市の第五学区とこいつ」と。
- ・学園都市の人口の八割が、学生らしい。
- ・20年ぐらい科学が進んでこいつ。
- ・第七学区がもっとも施設が集中しているこいつ。

という感じである。

これからまず分かることは、俺の知っている街ではないとこいつ」と。

それと、俺がいた日本とは違つ場所だといつこと。

一つ目は、俺が気を失つている間に時が進んでいく、一つの間にかここに居たといつ可能性もあつたが、

青髪さんが俺のことを「お嬢さん」と呼ぶどころか、あまり歳をくつていないと分かる。

そして、数年でひとつの都市がここまで発達するわけがないと思つので、

俺の知つている日本ではないことが分かる…

自分で考えたことだが、もう冷静になれない。

(もう無理だ。こんな馬鹿なことがあつて堪るか…)

ありえない、もう家族…親父と母さん、美晴に会えないなんて…
考えられない、俺がちがう「俺」になつていて…
体の奥から来るいやな感じが、だんだん込みあがつてくる。

今俺がいるところは、コンクリートの歩道の上。
ようするに他の人が通る道でもある。
こんなところで吐いたら、
他の人が迷惑極まりない…
情けないが、青髪さんに頼ろうつ。
頼るため、声をかけようと思ったが、
様子がおかしい俺に気づいて、

「ユウちゃん、大丈夫か?なんや、気分悪そつやけど…」

「すみません、近くにトイレがありませんか?…すこし吐き気が…」

「まじか…ほな、急いでとか、あそこのコンビニのを使おつか…」

やつぱり優しい、よかつた青髪さんだ…。

「はい…ありがとうございます…」

「うん？別にええよ。」

俺達は、コンビニに急いだ。

「ありがとうございました。」

「ふふふ、 ようなつたか？」

「ハビ」のトイレで、皿の中の水を全部呑んだ。ところが、なぜか、嘔液だけだつた…

(なんでだろう? 点滴とか、病院食だけだったのかな...)

だけど、それなら、なんで公園のベンチになんかに?
やっぱり、異世界?

「どしたん、まだ具合悪いかあ？」

(あ、しまった。また心配させちゃった。)

「あ、え、いえ、良くなりました。ありがとうございました。」

「そりかあ？まだ具合悪いなら言ひてなあ。」

なんか、青髪さんつて、お兄さんみたい…。

美晴もこんなかんじだつたのかな？

……吐き出した後、鏡に映つた俺は、やつぱりちがう「俺」…、肩まである茶色い髪に、将来美人になりそうな整つた顔があつた。ここまできたら、認めるしかない。

俺は、この娘の魂を追い出し、居座つてしまつた…。

罪かもしれない、だが、無意識に起きたこと…

だからこそ、そのことを戒めながら、生きていこうと思つ。憎まれているかもしれない、いや、憎まれているだらつ…。自分の人生を奪われたのだ、俺が生きたいばかりに。

だから、戒めて生きる。この娘の分だけ必死に生きていこうと。

「ふふ、青髪さんつて、お兄さんみたい…」

「おふう、ええ笑顔や…」

なんだか、吹つ切れた。

楽しく生きていく。

それだけを考えよう、今は。

3話 第七学区 中篇（後書き）

皆、普通に憑依しちゃつているけど、
実際に憑依してみるとこんな感じかなと
思って、書いてみました。
おかしいかもしませんが…

つて、あれ？

青髪君、変な方向に勝ち組フラグ？

番外編（前書き）

本編に関係ない話です。

高橋 優の元の世界の話です。

読まなくても、関係ありません。

おかしい点があるかもしれません
が、どうぞお楽しみください

「ひたしふり、お兄ちゃん。」

私は毎月、お兄ちゃんのところへ行く。
お兄ちゃんの眠っているお墓に……

お兄ちゃんが死んでから、長かった10年…
お兄ちゃんが果たせなかつた高校も、入学してから卒業まで終わ
つた。

最初は、悲しくて、苦しくて、助けたその娘もいまでは友達…
本当は、許せなかつた。

なんで彼女が生きてて、お兄ちゃんが死んだのか…
彼女が居なければ、あんなことにはならなかつた。
私は、彼女を憎み、殺したかつた。

(でも、冷静になつて考えたの…それじゃ意味がないって)

彼女が生きてるには、お兄ちゃんのおかげ…
なのに、殺しちやつたら、お兄ちゃんのしたことが無駄になつて
しまつ。

むしろ、あの娘が苦しんで、いじめられて、自殺とかしないよう
に、
助けなきやいけない、彼女を。死んだら、お兄ちゃんのしたことを
が無駄だ。

だから、友達になつた…
最初は憎かつた、私に笑顔を見せる彼女が…
でも、我慢した。

我慢した。

そして、だんだん憎しみが消えていった。

「本当の友達」になれると思った。

だから、高校生になってから、ある日。

全てを彼女に言った…

彼女は、泣いた。そして、彼女も私に本心を言ってくれた。
彼女も怖かつたのだ、私が…

それから、私達は、「本当の友達」になった。

「それでね、お兄ちゃん…」

好きな人ができる…

私のことを理解してくれる人…

すこしおにいちゃんと似てる人の事を好きになった。

「お兄ちゃんぐらいにかつこよくないくけど。」「

でも、いつも笑わせてくれたり、慰めてくれたり、
友達との関係も告白したら、受け入れてくれた。

お兄ちゃんに似てるとも言つた。

受け入れてくれた。

好きだといった。

彼も好きだといつてくれた。

それだけでうれしかった。

私よりも、どじでかつこ悪いけどね…

「お兄ちゃん、私は元気だからね…」

もしも、お兄ちゃんにまた会えるな…

抱きつきたい、昔みたいに。

でも、もう無理…

なんか悲しくなつてきた。

涙が出てきた。

誰かに見られたらどうしよう…

でも、涙が出る。

泣き終つた。
散々泣いた。

「やうそろ行くね、お兄ちゃん。」

明日も、大学にバイトがある。
他の日も、彼とのデートもある。

今を生きていふ。

だから、私は行く。

明日く…

「じゃあね、お兄ちゃん。」

立ち上がったときに、風が私に当たる。
狙つたように…

「ふふ、お兄ちゃんだつたりして…」

ありもしないことだけ。

お兄ちゃんがもし、どこかで生きているなら伝えたい。

「私は、幸せです。だから、お兄ちゃんも幸せにな
私は、そつ伝えたい……」

番外編（後書き）

どうでしたか？

ありえない話かもしだせんが、

高橋 優の妹 美晴が幸せになるために
書きました。

そのままじゃ、彼女がかわいそうだと思つて

これつて、短編のほうが多いですかね？

4話 第七学区 後篇（前書き）

やつと、本編に介入…

4話 第七学区 後篇

紅く染まつた空。

いつの間にか、夕方になつていたようだ。

「コウちゃん、第七学区のこと分かった？」

「はい…その、ヘアゴムを置つてもひりただけじゃなく、お食事まで…ありがとうございます。」

「別にええよ、ボクは、コウちゃんのお兄さんやしー。」

「はは、それでもありがとうございます。」

あれから、青髪さんといっしょにセブンスミストに木の葉通り、コンサートホール前広場などを回つた。

その間で、俺が肩まである髪を邪魔だと思つたのを青髪さんが気づいて、

ヘアゴムを買つてもらえて、正直、嬉しかつた。

その後に、やこら辺のファミレスでご飯を奢つてもひりつた。

今日は、青髪さんにいろいろ迷惑かけた。

(…どうやって恩返しきょうかな?)

今から、恩返しすることはできない。

……

自分の身元とかが分かつた後に、恩返しきょう。

「あの…青髪さん?」

「うふ~」

俺は、連絡先を教えてもらひながら、後田に恩返しをしないつと申
う。

「その……今日の恩返しをしたいのですが、今はできませんから…
電話番号とか教えてくれませんか？」

「な……何、やと……」

驚いてる。

やつぱり失礼だったかな？

「あ、いやでしたね……」

青髪さんの気持ちを考えて無かつたかも……

「あああ、いやいや、ちやうちやう、ちやうなん。

驚いただけやー女の子からだつたら、大歓迎やー。」

本当かな……

本当は、嫌なんじやないかな……

「……本当にですか？」

青髪さんは、今日アツヒシヒの笑顔を見せながら、

「当たり前や、嘘だと思つかあ？」

本当に嫌そうじゃない…
良かつた、嫌われてないだ…

「じゃ、携帯を出しつつ…」

(あ、俺、この世界じゃ、もってないや…)

どこの電話を貸してもいいししかなぞやつ…
うん、それしかない。

「すいません…携帯持っていないんです。

どこの借りて電話しようとも構いません…」

「あら、な、しゃーないな。

ちょっと待つてくれや。」

青髪さんがどいかり出した紙になんか書や、
それを俺に渡した。

「ほい、ボクの電話番号。こいつでも電話してなあ。」

「…あらがどいかります、かなりず電話しまく。」

恩返しが、しないといけない。

(ついで、こつか、本当に暗くなってきたな…)

そう、もう夜が近い…

そもそも帰らなければ…どいつもく…

俺は、自分の家を知らない。

どんな風にこぐらのかも知らない...
やばい、またピンチになつた。

「ほな、行こうかあ。」

「え、どう?」

まだどひか回るのだね?...
俺は、いこはど、青髪さんと迷惑では?

「どひか、君の寮や。」

「あ、ああそうですね。あつがどひかでこます。」

良かつた。
寮があるんだ...
とりあえず行こう。

「ほな、バイバイ。」

「ほこ、わゆつなら。今口は、あつがどひかでこました。」

青髪さん」に寮まで送つてもらつた…
ここまでくれば、何とかなるかもしねない。

(とつあえず、寮の中に入らひ…)

俺は、ドアを開けよつした。

その瞬間、ドアの向こうから音が近づいてくる。
人が来る氣がして、さつと後ろに下がつた。

すると、いきよ／＼ドアが開き、誰かが／＼に走つてくる…

「ちよつ、危ない！…」

「うおお、ぶ、ぶつかる！」

そのまま、地面にうしろから落ちていぐ…
そして、背中に強い衝撃。

「あ痛た！…」

「わ、悪い、すまな…い、つて、御坂！」

俺を押し倒してゐる体勢で名前を言つたのは、
青髪さんと同じくらいの歳の男の人。

(…名前？…それがこの娘の名前？)

もしかして、この娘の名前を呼んだのか?
知り合いなのだろう…

「あ、あえず、退いてもらいたい。」

「あの、お兄さん…退いてくれませんか？」

「あ、ああ、悪い、退く。」

お兄さんが退いて、手を貸してくれた。
とりあえず、手をとつて、立つ。

「…ありがとうございます。」

「ああ、とこつか、お前…御坂妹？」

（御坂妹？姉妹でもいるのだろうか？）

「この娘を知つていいようだ。
彼にきいてみよつか…

「あの、俺、うつと、私をしつているのですか？」

そしたら、彼が驚き、

「…え？ どだ？ 御坂でも、御坂妹でもないのか…」

なんか、ややこになってしまった。

「どうあえず、急いでるんじゃないのですか？ 私に関係あるのです
か？」

「ああ…どうあえず付いてきてくれ！」

(悪い人には、見えないけど…)

とりあえず、付いていこう…

4話 第七学区 後篇（後書き）

どうでしたか？

やつと介入することができます。

急いでる時の上条さんって、これでよかつたですかね？

感想お待ちしております。

5話 絶対能力進化

S H I F T — (前書き)

6

| | | L E V E L

やつとアクセラレータ編
終盤。

お楽しみください。

5話 絶対能力進化 —— LEVEL 6 SHIFT ——

俺は今、ツンツン頭のお兄さん 上条 当麻さんに、付いていっ

てる。

上条さんが言つには、御坂 美琴さんといつ少女の細胞を使つて、
妹達シスター・ズというクローンを2万人作ったというか、生まれた。

彼女達を一方通行という学園都市最強のレベル5によつて、殺害して、

レベル6となる、ふざけている計画。

それを阻止するために、御坂さんが研究所や関係施設を襲つてい

るらしい…

それでも、止まらない。

上条さんは、御坂さんを助けるため、急いでいる。

(俺にできることがないのか?)

驚いている。

この学園都市は、超能力を開発していることが…
俺のいた世界では、考えられないことばかり。
でも、上条さんは、ふざけている様子などない。
御坂さんを助けるため、走つている。

全部、事実だろう…

俺も助けたい…そんなことを思つていると、

俺は、なにか感じることができた。
存在が大きいもの…

(これって…あ、もしかして…)

会つたときに、上条さんが俺のことを御坂さんや、妹達と間違えた

(「この娘は、妹達と同じ能力だから分かるのかな?
……といつあえず、上条さんに報告しよう。」)

俺は気づいたことを上条さんに報告した。

「！ それがあつたか…どつちだ？」

「ええと、あつちだと思います…」

俺は、大きな存在の方向を指で示した。
その先には、風がないのに回っているプロペラが回っている…

「あつちだな、分かった。いくぞ！」

それでは、効率が悪い。
間に合わなくなってしまうかもしない…
一手に分かれよう…

「あの、一手に分かれましょ！」

多分、今でも、計画が実行中だと考えられるから、
一方通行を俺が時間稼ぎをすれば、彼女達を助けることができる
かもしれない…死ぬ可能がある。
でも、助けたい！

「はあ？ なんで…」

「その計画が実行されていると思うのです。だから……

ええと、私が探そうと思うんです。

私だったら、探すことが出来ると思こまやし…

「だけど、それじゃ、危ないだろー。」

それは、分かつている。

卷之三

「…それでも、彼女達を助けてたいんです。」

殺されるために生まれ出されるなんて、おかしい……

だからこそ、俺が頑張らないと

「……わかつた、でも、死ぬなよ。」

よかつた、上条さんが理解してくれた。

「あたりまえです。死んでたまりますか。」

俺達は、それから一二手に分かれた……
妹達を助けるため……

「午後八時二九分、四五秒、四六秒、四七秒
これより第一〇〇三ニ次実験を開始します、
被験者アクセラレータは所定の位置に着いて待機してください、

ヒミカは伝令します。」

乱造品が淡々と告げた。
どうやって、殺そうか…
楽しめる殺し方を考える。

(血の逆流は、やつたしなア…撲殺か?)

一万も殺せば、つまらなくなる。
話しかけてみても、会話が成立しない…
いつも変わらない反応…
つまらない。

(どオしてやろオかなア…ン?…どうい'ことだ?)

俺が疑問を思わせる原因は、ひとつ…

「おいおい、一人じゃ勝てねエからって、二人がかりですかあ?
意味ねエよ。」

「なにを言つているのですか、ヒミカ…え?」

乱造品がやつと気づいたみたい。
ポンコツ品だな。

「なんで、いるのですか？ 今日の担当は、このミサカです、と
ミサカは何故、ミサカ 10039号がいるのか、疑
問を抱きます。」

やつの後ろにまた一個、乱造品がいた。

(10039号ねエ、間違えたつていうこともねエしなア)

その顔は、今までの無表情な乱造品とちがい、
怒りに満ち溢れている顔している。
なにかちがうようだ。

「お前がアクセラレータか…」この計画をやめさせてやる。」

計画をやめさせん?
といふことは……

「俺をたおすつて」とかア？ ハッ、おもしれエ、一人がかりで來
い！

肉片に変えてやるよオー！」

おもしろい。

なんだか今日は、楽しめそうだ…

S I E D end

どうでしたか?

アクセラレータの口調をこれでいいのか分かりません。

感想お待ちしております。

6話 一方通行 アクセラレータ

前編（前書き）

おかしい点があれば、『報告を…』

お楽しみください。

6話 一方通行 アクセラレータ 前篇

Side ミサカ 10032号、御坂妹

「俺を倒すってことかア？ハツ、面白れえ、二人がかりで来い！
肉片に変えてやるよオ！」

一方通行が、顔面を引き裂くような笑みでミサカたちに言つ。だが、それより気になつたのがミサカ10039号の事だった。

(あのミサカは、ミサカではない？)

(このミサカは、ありえない想像を考えます)

ありえない。

もしお姉様の秘密の姉妹だとしても、あの頭に着けている電子ゴーグルをなんと説明すればいい？他のミサカにもらつたというのか… ありえない。
一応、他のミサカに聞いてみよう……

『すこし確認したいことがあります、とミサカ10032号は他のミサカに質問があります。』

ミサカネットワーク。

これが、ミサカたちを繋ぐ…

『何のようですか？ とミサカ10033号は、

ミサカ10032号に驚きつつも返事をします。』

本当は、必要ないが…

『ミサカ10039号を見かけませんでしたか？　とミサカ10032号は、

第一〇〇三一次実験のときに居なかつたミサカ10039号に

ついて聞きます。』

『いいえ、見かけませんでした、とミサカ10033号は、業務を怠つたミサカ10039号に怒りを抱きます。』

やはり…では、ミサカ10039号本人に聞きましょうか…

「え…」

つながらない。
テレパシーを送ろうとしても、つながらない。
どうこうことだらうか？

「一方通行、すこし時間を貢えますか？」とミサカは、ミサカ10039号とすこしお話があるので、許可をもらいます。」

許可をもらえるか？

彼は、このまま続行してしまつ可能性がある…

「あア？……あア、そオいうことかア…
いいゼエ、はやくしゃがれ。」

事情がわかつたのか、彼は許可てくれた。

「ありがとうございます、とミサカは、
いそいでミサカ10039号のもとへ行きます。」

「え、どういうこと？俺、わかんないんだけど……」

やはり、ミサカではない……

何かの影響で、別人格になってしまったのか？

「いいですから、来てください、とミサカは、
ミサカ10039号の腕を持つて、強引に引きつります。

」

「え、ちょっと、待つて……」

Side end

Side 一方通行

「なるほど、なるほど……そオいつことかア……」

俺の予想では、あれに別人格が入り込んだか、それとも、
二重人格になつたか……
だが、それは関係ない。

「……ヒヒ、やつとおもしろそオなのが來たじやねエか。」

俺に対して、真正面から宣戦布告…
学園都市最強の俺に、第三位の乱造品が？

「面白れエな…殺し甲斐がある。」

…決めた、今日の殺し方。

いたぶり続けて、だんだんと殺そつ…

「あの自信氣な顔を、男が喜びそオなアヘ顔にしてやるよォ！」

楽しみだ…

そして、

ドオン…！

大きな音が響いた…

（ン？…なンの音だ？…まあ、関係ねエな。）

今は、こちらの方が気になる。

Side end

Side ゴウ

やつぱり、俺は妹達の一人だったみたいだ。

（予想はしてたけど…超能力も使えるみたいだ…）

能力は、発電能力…

大体、五万ボルトらしい…

(五万ボルトって言つても、結局電流だし… 関係ないなあ。)

第一、ミサカ10032号さんが言つことは、
あの男、アクセラレータには効かないらしい。
なぜかといふと、
あの男は、あらゆるモノのベクトルを触ただけで
変換することができるらしい…

(化け物じやん… 外見的にも怖いけど…)

外見も、
髪が白い。

肌も白い、全世界の女の子が羨むだろうぐういに。
白いばかりと思ひきや、
目は、爛々と紅い。

(アルビノかな… それとも、なぜか色素が薄くなつたのかな… 白
髪?)

ともかく、
外見も恐ろしい。
能力も、恐ろしい。
そんなやつに、挑むのか…
死ぬかな…

(怖いな… また死ぬのは。)

暗闇に落ちていく感じ…

怖い、怖い、怖い。

怖い。

でも、俺が頑張らないといけない…上条さんが来るまで。

そうしないと、妹達が死ぬ。

死ぬのは怖い、だけど、死なせたくない。

だから、挑む。そして、生き残る…妹達と共に。

「…ふう…、よし行こう…ミサカさん。

君の作戦で行こう。」

ずっと俺を見ていた彼女、思つ」とはたくさんあると思つ。實際、彼女にいろいろ聞かれた。

何故居るのかとか、貴方は誰とか。
でも、それはあとから…
生き残つてからにしたい。

「はい、では、実験を再開します、とミサカは、所定の位置に着きます。」

「絶対に生き残るよ…私達は。」

絶対に生き残つてやる！

Side end

6話　一方通行　アクセラレータ　前篇（後書き）

妹達の喋り方って、これでよかつたですかね？

やつと、戦闘シーンに入ります。

初めてなので、そこを「理解いただければ…

感想お待ちしております。

7話　一方通行——アクセラレータ 後篇（前書き）

長くなりました。

できもあまりよくありません。

それでもよければ……どうぞ

side ゴウ

「何だよ何だ何ですかア？」

あんだけ啖呵きつてた癖に逃げンのかよ…
もつと楽しませろよ！」

「うるせえ、クソ白髪もやし野郎！」

「あ？ 欠陥品が調子乗つてんじゃねエよ！」

俺は バックステップで距離をとりながら、
一方通行を挑発する。

俺の役は、すこし攻撃しつつ、一方通行の意識を
多くこじりにひくようにする囮役だ。

俺が囮役をしている一方、ミサカ10032号さんは、
電気の扱いが俺より上手だから、
すこし避けつつ、オゾンに変えていく作業をしていく。
この作戦は、元から考えていたそうだ。

「ハア、ハア…糞、逃げ回りやがって…」うざエ。」

だんだん効果が出てきたみたい。

「くそが、速攻殺してや……あア？」

「もう疲れたか？ いい様だなモヤシー」

?

急におとなしくなった…もつ酸欠状態?
なら、あともひすこしだな。

(よし、勝て…「あア、なるほどなるほど。そオいつことかア…」

また元気になった…

こいつ、本当に人間?

「ハツ! いいねいいね、最っ高だねエオマエラ。

酸素原子をオゾンにしてるつて訳力エ…

ははつ、退屈しねエな、

流石に一万回もぶつ殺されてりや悪知恵の一つでも働く
つてかア!」

やばい、もうばれた!

どうすればいい…

考える俺!

「さて、まずは……そっちのお邪魔な真面目ちゃんから遊んでやる
よオ。」

そう言ひて、一方通行は素早く、ミサカ10032号ちゃんの方向へ
と跳び、

彼女の目の前に立つた。

(くそ、動け俺、動くんだ! 彼女を助けるんだ、彼女達をーー!)

恐怖で動かない体。

ばれて、殺されることを恐れる俺…

(逃げればいい。そうしたら、生き続ける...)

ふざけるな。

何のためにここに来た。

なぜ、この戦いに参加した。

妹達を助けるため...

それだけ。

だから...

「喰らいやがれ、一方通行！」

奴の下へかけていき、懐へと入る。

それから、俺の右手を顔に向けてから、

電撃の光で隙を作り、ミサカ10032号さんを助ける。

俺が考えた助けるための作戦。

(奴だつて、人間だ。突然の光で、一瞬怯むはずだ。その隙に助け
る...)

自分でも驚く。

覚悟をした瞬間に突然思いついた。

どうしてかは、分からない。

神様がくれた?

神様が人を助けるなら、戦争だつて起きないだろう。
俺にとつて、そんな神様など関係ない。

俺は、最大出力の電気を掌に出す.....

はずだった。

「クク、眼にはまつてくれて、ありがとうオ！」

お礼にじっくり遊んでやるよオー！」

俺の腕を誰かの手が掴む。

その手を見る。

その手は、透き通るような白さ

女の子のよつな、細い指。

その手の持ち主は…

口が裂けるよつな笑みの一方通行。

(やばい…絶対殺される…)

殺される恐怖に俺は、とつて口を開じた…
そして、

何も起きない。

奴は「あらゆるベクトルを扱う」能力だから、
そのまま血とかを逆流させたりするのだろうと
思っていたが、ちがうのか？

もしかして、

(上条さんが助けに来てくれた?)

そつと、目を開けてみた。

そこには、鼻先1㌢ぐらいまで顔を近づけた一方通行の顔。

「残つ念でした、希望なンてねエよ!」

弓き裂いた笑顔が視界いっぱいに広がる。

そして、そのまま俺の腹へと膝蹴りが来る。

Side end

Side アクセラレータ

「う、はっ…!?

俺は、この欠陥品の失敗品に対し、
すこしふくトルを変化させて、腹に向けて膝蹴りをしたら、
顔が悲痛の顔に変わって、そのまま胃のものと血を吐き出す。
いい様だ。

「おーおー、S心が疼くいい顔になりやがって。

もう、イツちまつたか? まだ遊び足りないぜエー!」

さて、

少々時間を喰つたが、予定通りじっくり殺そり。

どんな顔になるやら…

諦めないようとしない顔？

絶望した顔？

(なんでもいい、コイツのいろんな顔を見てみて。)

跪く失敗品の腹をもう一度蹴ろつ弾つて、
右足を振り上げたが、

電撃が来た……

「貴方の相手は、」のサカです、と

「サカは一方通行に告げ……、さやああー」

電撃をそのまま空へと反射してから、
乱造品を風のベクトルで、コンテナに叩きつける…
多分、気絶しただろ？…
今は、こちらに集中したい。

邪魔するのが居なくなつたので蹴るのことに専念する
蹴る、蹴る、蹴る。

「が、アア、ガア……！」

もう弱つてゐるのか…

「もうちょっと、抵抗しろよ。

つまんねエな。」

「あ……」

失敗品が何かを見ている。

(何を見てんだア？ もう走馬灯でも見て……アア、そういうことか)

「……、おい。この場合、『実験』つて、どオなるンだ？」

俺の後ろに、一人の男が居た。

「……離れろよ、テメエ」

7話　一方通行——アクセラレータ 後篇（後書き）

どうでしたか？

どうかえるか、考えた結果、

御坂妹をあまり怪我させないという結果に終わりました：

すこし質問で、

あまり変わりませんが、

上条さんと一方通行の戦闘を書いたほうがいいですかね？

感想、お待ちしております。

すゞへ短めです。

次に、上条さん♂一方通行です。

side 上条

青い光が消えた。

(な、まさか……いや、そんなはずはない。)

それだけでは、あいつらが殺されたと言えない。
今は逃げているだけかもしれない。

(生きてるはずだ……間に合ってくれ…)

俺は、コンテナの間を駆け抜け、
電気が見えたところへと行く。

「はあ、はあ……くそ、何処だ！？」

目印がない中、探していたが

ユウも、御坂妹も、

そして、一方通行も見つからない。

「まさか……間に合わなかつたのか…」

そうだとすると、

彼女達は死んだことになる。

そんなのだめだ。

(俺は、助けるんだ。御坂も、ユウも、あいつ等もー。)

当ても無く走る。

走る、走る、走る……

コンテナの間を走り抜けると、
開けた場所へと着いた。

すると、出たすぐのところに
茶髪の少女が倒れている。

御坂妹だ……頭から血が出ている…
すぐさま、俺は彼女に駆け寄る。

「おい、大丈夫か！？しつかりしろー。」

御坂妹を揺すりながら、言つ。

「…ん、ぐ。」

よかつた、生きてる。

御坂妹は頭の傷以外、あまり怪我していないようだが、
氣絶している、頭を強打したのだろう…
そう考へてゐるうちに御坂妹は、
ハツ！と目覚めた。

「……ユウさん！」

(ー・ユウに何があつたのか！？)

御坂妹の落ち着きようの無さから、
ユウが大変だと勘付いた。

「コウは、どこにいる！？」

「左35。の方角、100m先にいます、とミサカは、焦りつつも貴方に教えます。」

左を見る……

そこには、遠くからでも分かる白い髪……あそれが一方通行。

「わかった、ここで待つていろ。」

「コウは、俺が助ける！」

御坂妹だつて、怪我をしている。

無理に参戦してもらわないほうがいい。

「いいえ、ミサカがいきます、とミサカは
再度、一方通行に挑みます。

ミサカは替わりがいくらでもあります、
あなたこそ、待っていてください、とミサカは
替えができない貴方に言います。「

何を言つているんだ？

「ミサカは、単価18万円にして、在庫9968も余りのあるモノ、
と

ミサカは説明します。

「コウさんも、人格から違います……ミサカ達とは違い、
もう一人の人間ですから、彼女も替えることもでき
ません、と

ミサカは、続けて説明します。

ですから、替わりがいくらでもあるミサカが死んでも、問題ありま「そんなもん、関係ねえ！」え…

？」

関係ない、

俺達は

「俺も、ユウもそんなの関係ねえんだよ！」

俺達はお前を助けるために戦ってるんだ！

替りがいくらでもきくとか、単価18万円とか、そんなこと、どうでも良い！」

俺は俺、御坂妹も御坂妹である。

「お前は、世界でたつた一人しかいねえだろ？が！」

俺はそう思つ。

御坂妹は、モノではない。

人間だ、生き物だ……

生き物に同じのなんていない。

「勝手に死ぬんじゃねえぞ。おまえにはまだ文句が山ほど残つてんだ

お前は黙つてそこで見てる。」

アイツを、
ユウを助けに行く。
そして、

「俺が一方通行をぶつ飛ばす…！」

Side END

どうでしたか？

とりあえず、必要だと思い、
ここも書きました。

感想、お待ちしております。

妹達編 ハローゲ（前書き）

おかしい点が多いかもしませんが、
どうでもお楽しみください。

妹達編 ハピローグ

side 上条

「おーおー、今日はイレギュラーが多いなア……

次は、完全な一般人ですかア？」

目の前の男、一方通行がなにか、興ざめしたとこりつ感じに眩く。
俺は、奴の背中の向こうにいるコウを見る。

見えるところには傷がないが、

口からは血が出ており、

呻きをあげながら、苦痛の顔をしている。

おそらくだが、御坂妹よりもひどいだろ？
元からあつた怒りがさら立てみ上げてくる。

「離れうつってんだろ、聞こえねえのか。」

それでも奴は、『俺』に興味がないのか、
一人で呟く。

「どうすんだよこれ。『実験』の秘密を知った一般人の口を封じる、
とかつてお決まりの展開かア？ くそ、後味悪い
イナ。

なンせ使い捨ての人形じゃなくてマジモンの一般…

「ぐちやぐちや言つてねえで離れうつってんだろ、三
下！」

一方通行に對して、俺は啖呵を切った。

S i d e e n d

S i d e ユウ

目の前が暗転した中、

「おにいちゃん、ねえおにいちゃんつづばー！」

妹 美晴の甘い声が聞こえる……

何故だらうか、この世界には美晴は居ないはずだ……

「起きてって、おにいちゃん！」

やはり聞こえたる……

(夢だったのだらうか……)

それならば、悪い夢だ。

死んでから別の世界に行き、勝手に人の体を奪い取った。
それに加えて、また死に掛ける……

(……あれは夢なのか?)

ひとりあえず起きよつ。

「……おはよう、美晴。」

笑顔になつて、美晴に言ひつ。

「やつとおきたへ、もつお寝坊なあにこわやん!」

可愛らしい美晴の顔……

癒される……

その素敵な空間を邪魔するよつこ、呼び鈴がなる。

『ピンポン』

「ハア……誰だらう? 行つてぐるね、美晴。」

「うそ、こいつらしあしゃいー!」

笑顔で返事をしてくれる……

(まつたく、だれだらうか……友達とかだったら一発殴つてやる。)

少々危ないが、大丈夫だらう。

俺はそう思いながら、玄関を開けると……

「なにをしているのですか? と御坂1003号は

玄関を開けるのが遅いあなたに対しても、少々苛つきを

覚えます。」

ミサカさんが立っていた。

どうこうことだらうか……

(……あ、ミサカ 10039号って、俺が乗つ取つてしまつた娘
じゃないか)

もしかして、
こっちが夢?

そう思つた瞬間、

俺はそのまま、玄関の床に倒れた。

「こつてらつしゃい、おにいちゃん……」

白く染まる中、美晴がそう言つた氣がした……

知らない天井だ……

白い天井が目の前に広がつてゐる……
病院だらうか。

「つとこつ」とは……こつちが現実?』

悲しい。

「あ、『実験』は終わつたのかな？」

そうであつてほしい、そうでなければ、ここまでなつた意味がない。

「」で一つ疑問が湧いてきた。

(『『実験』は終わつたら、妹達はどうなるんだろう？』)

『作られた』彼女たちは、『実験』のモルモットと同じ扱いだ
つた……

なら、どうなる?
心配になつてくる……

「大丈夫かな……、どうしよう。」

「あ、起きてる……体、大丈夫?」

ドアが開く音と共に、一人の少女が言つた。

妹達と同じ顔が見えるが、

その顔は疲労の色がありながら、心配してゐる顔をしている……

「えつと、あの、その……」

「あ、え、ごめん。私のこと、知らなかつたわね。

私は、御坂 美琴つていうの。」

御坂 美琴……

妹達の元になつた人、学園都市第三位の超電磁砲。

そして、彼女達を助けたいと思つていた人。

「えっと、その…… ユウです。

……あ、ミサカ10032号さんは大丈夫ですか！？」

飛ばされてから、コンテナにぶつかった。

怪我をしているはずだ…… 打ち所が悪ければ……

急に大声で叫んだせいか、咳をしてしまった。

「お、落ち着いて……

あの娘は大丈夫だから。
だから、落ち着きなさい。」

「ほつ、そうですか…… 安心しました。」

なら、いい。

彼女が死んだら、意味がない。

それから、御坂さんが申し訳ないと言わんばかりの悲しい顔になり、

「その…… 彼女たちを助けてよつとしてくれてありがとう……

そして、ごめんなさい。

そんな大怪我させちゃつて…… 本当にごめんなさい。」

御坂さんは、なぜか頭を下げる、俺に謝る。

どうしてだろう？

「別にあなたのせいではありませんから、謝らなくても。

私が好きでやつた」とですしだから、顔を上げてください。」

「でも、あいつが来なかつたら……」

それでも、あげない御坂さん。

「私は、上条さんが来るのを信じてこましたかい……ほひ、顔を上げてください。」

やつと頭を上げた。

その頭を俺は、手をおさえ、撫でながら囁く。

「そんな悲しそうな顔しないでください、女の子は笑顔が一番ですよ。

……あ、じゃあ、あなたがそれでも自分が悪いといつなり、

お願いがあります。」

撫でられたことに恥ずかしいのか、赤面してる御坂さんが返事を返して、

「うん、うつて。」

俺が思いついたのは……

「私の前では、悲しい顔をしないでください。」

私が心配でもです。それと……

「うん、それと？」

もう一つあるが、これはすこし恥ずかしい……
むしろ、御坂さんが嫌がるかもしれないけど。

御坂さんが顔を紅くした次は、俺が赤面しながら囁つ。

「あの、その……
いやなら、いいんですけど……
そのへ、私と……友達になってくれませんか？」

「これは、俺の我慢……
断られても仕方ない。」

（俺だつたら……嫌がるかもしね）

でも、
一人は辛い。

「え……」

彼女の驚き共に顔を伏せる。

（やつぱつ、いやだらうな……）

「いいわよ、そのへりこ……

よろしくね……コウ。」

「え、あ……ありがと『やれこ』ます。」

彼女は笑顔でそう答えてくれた……。

「ひかりに来て、初の友達ができた。」

あ、青髪さんはお兄ちゃんみたいなものです。

妹達編 ハピローグ（後書き）

どうでしたか？

美琴の喋り方は合ってますか？

あ、上条さんと一方通行のバトルは
これから変わらないので、
飛ばしました。

追記・悪い点があれば、文章の最初から書き直します。

それと、第一主人公のプロフィールを先に乗せようと
考えていますが、いいと思いますか？

PROLOG (前書き)

最近、忙しくて更新できない上に
あまり調子が出ていないため、
今回は駄文だと思います。
それでもよろしい方はどうぞ、お読みください。……

PROLOG

九月十八日。

夕日が空を紅に染める時間帯、
一人、路地裏にいた。

「…………もしもし、なんか用ですか？」

面倒くさそうな少年の声が路地裏に響く。

少年は、高校生ぐらいになつたばかりのよつや少年の姿をして
いる。

彼は、携帯電話を持つて通話していた。

「へえ、そなんですか……で、どのくらいですか？」

興味を持つことができる内容だったのだろう。
少年は最初、面倒くさそうな態度から一変、
快く受け答えていた。

「え、そんなんに？ありがとうございます！頑張ります！」

どうやら予想外のこと驚いたが、『電話相手』に対しても、
感謝しているみたいだ。

「はい、構いませんよ……はい、ではー」

テンションが高いまま、少年は通話をやめる。
そして、足取り軽く路地裏を歩いていく。

S.i.d.e ヌウ

「 もしも、 青髪さん。 ヌウです。」

『 おお、 ヌウちゃんかいなあ～ 「 な！ 女の子だと…」

「 いやんだと… 』 の裏切り者！ 』

「 いじせ、 てめえがそんな幻想を抱いているなら、

まずはその幻想をぶち殺す！ 』

やかま

しいわー! 黙つときー! 』

青髪さん、 友達となんか話しているようだ。

もしかして、 明日からある『 大霸星祭』 のことについてかな？
外出許可を貰つたから、 青髪さんどうにか歩こうとよつかなど
思つたけど……

『 「え、 本当に女の子かにゃ～……
もしかして男の娘だつたりするかもしれないぜい。 』
そんな訳あるかい！ ……、 ないよね？ 』

忙しいみたいだ……

また今度にしようかな

「えっと……あの、明日からある『大覇星祭』で
お暇だったなら、一緒に学園都市を回つてもいいわ
と思って

電話をかけたのですが……お邪魔ですよね?すみません。」

『え、いや、むしろ大歓迎やで!』

いやなあ、ただ後ろにむさい男たちが群がつてなあ……

「むさい男とはなんだ、180cmも超えるでかさを持

つ男が

言えることかよ。」

「せうだにやー、青髪ピアスだけには言われたくない

ぜい。」

……外野は放つておいて、ビリで集まるんや?』

あれ?友達の方はいいのかな?

まあいいかな……

さて、何処にしようかな……

「じゃあ……第七学区の私達があつた公園でいいですね?』

『分かったわ。じゃあ、公園でね、バイバイ。』

「はい、また明日。」

青髪さんと約束して、通話を切る。

安心した。もしも、タイミングが悪くて嫌われたら、
どうしようかと思っていたが、

大丈夫みたいだ……

安心した矢先、一つ問題点が浮き上がった……

服装じいじょひ……

困つた……

体育祭みたいなものだから、体操服じゃないといけないかも。

「先生に頼んで、どうにかしてもいいつかな……」

先生……

学園都市にいる妹達の『調整』をやつている、
力エル顔のお医者さんだ。

御坂 美琴こと、俺命令「//コちゃん」によるヒゲ「太?」つていうキャラに似ているらしい。……

その先生に頼んで、貰えるように出来るかな
流石に無理かもしねない。

常盤台の制服はなぜか、用意できてるけど、
急には準備が出来ないだろ?な……

「一応きこひみよつと……」

不安と楽しみで心が一杯だ。

「いいなあ～、ミサカもいきたい！つて、ミサカはミサカは
見たことない『大覇星祭』に期待を膨らませてみ
たり！」

どうでしたか？

一つ考えていてることを言えば、妹達編が終わつたすぐ、または数日たつたぐらいの場面も出したほうがいいでしょうか？

「感想」、「意見」、お待ちしております。

1話 女の子（前書き）

大分遅くなりました……
しかも、駄文だと思います。
それでもよろしければ、どうぞ。

1話 女の子

Side ゴウ

返事はやつけて返ってきた……

「ん、問題ないよ。僕の患者が必要とあればどんなものも用意するよ」

そう言つてから、何処かに内線で通話を始めた。

「の入つて、何者だりつか？」

今やつさ、常盤台中学の体操服を頼んだすぐに準備してくれるつて……

なんかこの人にも迷惑かけすぎているな。

「あの、すいません……なんかいろいろ迷惑かけてしまって……」

俺の周りの人つて、いい人ばかりだな……

このお医者さん、上条さんやミコちゃん、青髪さんとか、皆、俺を助けてくれるいい人たちばかり……

恩返しとか……できないのかな。

いろいろと考えていたら、びつむら話が終わったようだ。

「じゃあ、朝、病室に置いておくな?

やつぱつ早いな。

「いつもお世話になつてゐるのに、こんな所まで迷惑かけてすいません。」

『調整』から身の回りのひとまで、この病院の人たちに迷惑をかけてばかりだ。

こんな言葉だけでは足りないくらいだ。

「いいよ、君は僕の患者なんだから」

この人、いつもこんなこと言つてゐる気がするな……

朝、起きたら、
ベットの隣にあるいすの上に体操服が置いてあつた……
あのお医者さんが準備してくれたものであつた。
俺はお医者さんに感謝しつつ、
外に出る準備を始めた。

そういえば、着替えるのに躊躇しなくなつたと思つ。
最初の頃は結構恥ずかしがつていたけど、
現在ではすっかり慣れてしまつていて。

たった数ヶ月で慣れてしまつてゐるといふこと……

俺の心がだんだんと女の子になつてきてゐる傾向なのだろうか?

「まあ……関係ないか」

俺が男でも、女でも関係ない。

俺は俺。

それだけだ。

考えながら、準備を終えた俺は、
病室から出て行つた……

Side end

Side 妹達

「目標、病院から外出しました、とミサカ13577号は
他のミサカに通達します」

(彼女を追いかけますか?) ミサカ19090号は
を 心配しつつ、提案します)
彼女のこと

(あなたは親ばかですかと、ミサカ10032号は

90号の提案に反対の意見を出します)

内心心配しつつ、ミサカ190

(第一、彼女はミサカたちが接近したら、気づくかと思います、と
ミサカ13577号は冷静に判断します)

(彼女が気づいた場合、追いかけていたミサカを誘う可能性があります、と

ミサカ10032号は彼女の行動パターンを発言します)

(……ですが、もしも彼女が悪い男に捕まつたりしたたりする場合も
性に対して、危機感を抱きます)

れます、とミサカ19090号は

彼女に新たな脅威が迫る可能

(考えすぎだと思います、とミサカ10032号は
否定しつつも、彼女の心配をします)

す)

(あなた達は、親ばかですか?とミサカ13577号は

彼女の能力があれば、安全か
と考えます)

(そ、そうですねと、ミサカ19090号は

ミサカ13577号の発言によ

り安心します)

(そういえば、彼女が会つ相手は男では?と、ミサカ10032号は
思つ出したように他のミサカに伝え
ます)

(たしか、彼女が言つこは『俺のお兄ちゃんみたいなもの』らしいです、と

『サカ13577号は彼女が前に言つていたことを思い出します』

(はつ、その男が脅威になる可能性があるのでは…?と『サカ19090号は

再び、焦り始めます)

(その男は『兄』というカテゴリーといつじになるのでは?と
『サカ10032号は記憶している事をそのまま出してみます)

(で、ですが、男は皮をかぶつた狼なのでは…?と『サカ19090号は

くなつてきました!)

今にも彼女を追いかけた

(落ち着いてくださいと『サカ13577号は
『サカ19090号の親ばかぶりに驚きます)

(今から行つても遅いでしょうと、『サカ10032号は

そう発言しつつも、心配になつてきました)

「あなたもですか、と『サカ13577号は

感染したか分かりませんが、『サカも心配になつてきました」

S
i
d
e

e
n
d

1話 女の子（後書き）

どうでしたか？

最近忙しくて、あまり更新ができませんでした。
すみません。

今後も、このようなことが続きます。

そのため、この小説を読んでくださる方々にはまたせるかもしれませんが、

頑張りますので、今後ともよろしくお願ひします。

感想、ご意見をお待ちしております。

2話 対策（前書き）

駄文になつておつます。
それでも宜しければ、どうぞ……

2話 対策

side ユウ

待ち合わせの時間には、まだ時間がある。

「まだ……だな。なにしようかな？」

青髪さんの高校は知らないので、応援には行けない……
お金もあまり使いたくない。
どうするべきか……困ったな。

「こままで歩いていても、日射病とかになりそうだし……
どこかの店にでもはいっていいかな。」

店の人には迷惑だと思つたが、日射病や熱中症にならないための
対処と妥協してもらおつ。

「あと、そこ辺に開いてる店はあるかな……

びついたんだね!」

店を探してると、なんか騒がしい声が聞こえた。
なんか、喧嘩とかかな?

「うへ、殺す…生きて帰れると思つたなよ…!」

それにしてもお姉様まで、公衆の面前で

あんなに頬を染めてしまつだなんて！

悔しいつたらありやしませんわーっ……」

「ちよ、待つ、白井さん……！」

落ち着いてくださいといつていつかどつしてそれだけの深手を負つているのに立ち上がりれるんですか……！

「」は少年漫画的ガツツを見せるような場面でもありますってばーっ……！」

俺から見えるのは、

荒ぶるツインテールの女の子と頭にすごい花飾りをした女の子が言い争い？していた。

（仲裁に入ったほうがいいんだろうか？）

ツインテールの女の子は、包帯を巻いている……

大きな怪我をしたのだろう。車椅子を使つてゐようだ。

そして、多分それを連れ出したのが花飾りの女の子だと思つ。

いい子だと思つ。

病院で一人、外を眺めていては楽しくないだらう。

それを思つて、連れ出したのだらう。

「」まで、仲がいいんだ。

喧嘩して、どちらもいやな気持ちになるのはだめだらう……

とりあえず、仲裁してみよう。

「あの～、どうしたんですか？」

「周りの皆さんが驚いていますよ？」

一人に声をかけてみたが、それが驚いたことに

「え、あれ、御坂さん！？ 今せつぞく画面に注いでいたの、

ビ

「うじていいーーー？」

「お、お姉様！？」

あ、あれ？まさか、ミコちゃんの知り合ーー？
ちょっとやばいかもしれない。

「え、あ、その……」

ビックリして口籠つてしまつ。
動搖しまくつて、うまく喋れない……

「お姉様？どうしたのですの？」

顔が青ざめますわよーーー？」

やばい、顔に出ているようだ。
ちゃんと対策したことと言わないと、

「わ、私は……」

「私は？」

「ええ、俺。頑張れ俺！」

「ハタヤさんの親戚でしゅーーー。」

……噛んだ。

S i d e e n d

2話 対策（後書き）

どうでしたか？

黒子の喋り方、難しいですね。
すこし、練習してみます。

感想、ご意見お待ちしております。

3話 お姉様（前書き）

大変お待たせしました。
すこし用事が込み合いまして……
あまり書く暇がありませんでした。
これからも遅くなるかも知れませんが、
今後ともよろしくお願いします。

では、駄文ながら、どうぞ……

Side 黒子

「//「ちやんの親戚でしゅーーー！」

「ふはあーーー？」

可愛いすぎる、なんだろうかこの生き物。で、でしゅ……なんという可愛い噛み方……

しかも、噛んだ後の仕草も、

顔を真っ赤にして、すこし涙田になりつつ、その上、パニックで混乱している姿はまるで、親と離れた子供のよう……興奮が止まらない。

「だ、大丈夫ですか、白井さんーーー？」

初春がなにか言つているが、そんなこと頭に入らない。

私の頭は、目の前の可愛らしいお姉様の親戚（？）らしい女性の

こと

いっぱいだ。

しかも、この少女はとてもお姉様に似ている。よつて私の視界に映るのは、まるでお姉様が恥ずかしがつていてるよつにしか見えない。

むしろ、お姉様だ。

そうだ、お姉様だ。

私はこの気持ちをお姉様に伝えるために、愛の抱擁をする……

「か……可愛いですわ～！～お姉様～！～」

「わ～え、なに、どうしたの！？」

いつもみたいに電撃で愛のムチをあたえず、
動搖するお姉様も可愛い！

ああ、こんなお姉様見たことない！

「お姉様、ああお姉様、お姉様！～」

「！」の娘、大丈夫なの！？怪我してると、こんな力入れて

「そ、そうですよ～白井さん、落ち着いてください～」

「ぐへへへ……はつ～私としたことが～」

そうだ、今あることば～

「！」のお姉様のお姿を[写]真に収める」と～～。

Side ユウ

十分ぐらい経ち、
なんだか興奮していた少女がやつと落ち着いてくれた。

「本当に失礼致しました……」

「あ、いえ、落ち着いてくれてありがとうございます」

今、俺達は近くにあつたファミレスで、
休憩している。

ファミレスの中は、まだ昼休みでもないが、
“外”から来ている人が結構居た。

「私の名前は、白井 黒子ですね。よろしくお願ひします

「あ、えっと、私は初春 飾利です。」

ツインテールの女の子が白井さんで、
花飾り（？）をつけているのが初春さんか
俺も自己紹介返さないと……

あれ、どうしようつ…… 苗字考えてなかつた……
やばいかも。

「あの……お名前はなんですか？」

白井さんに聞かれた、更に焦る。
……「うなつたら、

「た……高橋 ユウです。ユウでいいです……」

「ユウさん、よろしくお願ひしますの」

なんとか誤魔化せた……
大丈夫そうだ。

「えっと……それで、御坂さんは親戚でしたよね？」

「あ、はこひです」

「へつこひ設定だ。」

「でも、私は同じ常盤台中のですの」と、コウセイのことを知りませんの……」

えつと、こういつ場合は……

「お……へつん、私はちょっと体が弱くて……」

学校行ってないんです。

だ、だから今日せ……ちょっとでも学生生活を楽しみたくて……」

せつから體をついてばかりだが、

学生に戻りたいといつ氣持ちせずつとある。

「そうでしたの……では、その体操服はお姉さまのですの?」

実際は、お医者さんに準備してもらつた物だが……

「え、はこひですか」

俺はすこし落ち着くために、頼んだオレンジジュースをゆっくり飲む。

「……初春、ちよつと……」

「はー、どうしましたか……はー……はー……」

なんか一人で話している……
もしかして、嘘だとばれた?

「あ、あ、あのじりしましたか?」

やばい、声が震えてる……

「ごわごわ……今からお暇ですか?」

まやかしの学園都市で警察の代わりをしていく警備員アンチスキルに
突き出すとか……

「え、あ、その……」

動搖しそうで、声すら正しくだせない。

「このままだったら、きっと悪い状況になるかも……

「私達と一緒にまわりません?」

どうやら切り抜けられたようだ……

s i d e e n d

3話 お姉様（後書き）

読んでください、ありがとうございました。
黒子の喋り方、合っていたでしょうか？
個人的には、このような感じです。

ご感想、ご指摘、お待ちしております。

4話 白井黒子（前書き）

駄文ですが、
どうも……

4話 白井黒子

Side ユウ

俺は白井さんたちの提案を承諾して、青髪さんと会う約束をした第五学区の公園に向かいつつ、露天で買つたり、食べたりしている。

露天であつたバニラ味のソフトクリームを食べていたら、白井さんが聞いてきた。

「たしか、ユウさんと待ち合わせをしている方って、殿方の方ですわよね？」

白井さんたちには、

『公園で男の人と待ち合わせしている』と言つただけ。何か疑問でも湧いたのかな？

「うん、本名は知らないけど、

私は“青髪さん”って呼んでますよ」

青髪さん、何で教えてくれないのであつ까？
不思議だな。

「え、大丈夫ですか、それ？悪い人とかじゃありませんか？」

初春さん、俺が青髪さんの本名を知らないから、心配してくれてるのかな？

「でも、やさしい人ですよ？」

俺がこの世界にやつて来て、他人の俺にも優しくしてくれたとても親切な人。

入院して、一時経つたあとから電話で話したりしている。

「そういう人に限って、本性を隠して接したりするのですわ！」

コウさんは、本当に可愛らしいお姿

をなさつていらっしゃるから、

余計に危ないですの！」

白井さん、俺の心配してくれてるなんて、いい人なんだな。俺も見習わないと……

「青髪さんって、悪い人には見えませんよ？ 見たら分かると思うけど……」

「そ、そうですの？」

「コウさんが大丈夫つておっしゃるなら、黒子は気にしませんの……」

すこし残念がつてゐる……

俺に話が伝わらないと思つたからかな？ 不安がらないような笑顔をしながら、

「白井さん、心配してくれてありがと。」

初春さんも、ありがと。」

「は、はう~!?

わ、わたくしは、お姉様という存在がいるのに、

コウさんにも心惹かれしていく……

ああ、お姉様……こんな黒子を許してください

まし!」

「えつと、」
「…………」

恥ずかしながら返事をしてくれた初春さんと
なぜか、一人ぶつぶつと呟いている白井さん……
白井さん、またどうしたんだろうか?

「いつもテンション高いな~。」

「いえいえ、今来たばかりですよ」

本当に今着たばかりだ。
ずっと話しながら来た為、
時間も忘れていたのかも知れない……
気をつけないと……

「ん？ そここの女の子達は、友達かいな？」

「あ、はい……初春です。で、

「いらっしゃ……白井さんです……」

初対面のためか、警戒気味の初春さんと
物凄く笑顔な白井さん……なんでそんなに笑顔に？

「どうせ、よろしくお願ひしますね」

そういうった瞬間、彼女はその場から消えた……
あ、あれ……どこにいった！？
と思ったが、いつの間にか青髪さんの隣に居て、
青髪さんに小声で話している……
あれも、能力なのかな？
能力的には瞬間移動かな。
まあ、いいや……

なぜか本人の髪の色のように顔を青くしている青髪さんから離れて、時計を確認してから白井さんは初春さんと言つ。

「では、初春……あなたが戻つましゅう。」

ゆうおぬですの」

「あ、はい。

じゃ、じゃあ、白井さん、青髪さん……また会いま
しょう?」

「じゃ、白井さん、青髪さん……」わざと離れた

「ジバクラー?」

?

なんで青髪さん、びくびくしてこらのかな?
なにか言われたのかな……

「またね、白井さん、初春さん」

自然と笑顔でお別れをした。
ここまで楽しかったかな?
また会いたいな……

俺は、なぜか空を見ながら去っていく白井さんと
車椅子を押す初春さんを見送って、青髪さんに話しかける。

「じゃあ、行きましたよ?……ビバったんですか?」

「エーッまあだいぶびくじてこの青髪さんの姿があつた。

Side 青髪ピアス

ボクは、じつに恥く

「最近の女の子、こわいわあ～」

なんや、あのこー？
ものすげ怖かったわ……
だつて……

「もしも……こわい手を出したり……」

女の子が泣くなつた声で

「あの時は……」

田は殺氣、体からは黒いオーラが見えた……

「貴方様の男としての尊厳を無くせしもひこますわよ～」

あの子さうボクに囁いた……

「やつぱ、こいつらが最高やな……」

正直、僕の天使や
……

s
i
d
e
e
n
d

4話 白井黒子（後書き）

どうでしたでしょうか？

黒子の執念って、こんな感じかなと思にながら、
今回書きました。

「感想」「指摘をお待ちしております。

5話 几（前書き）

すいません

夏休みになつたのですが、
課外授業でまつたく書くことが出来ませんでした。
いえ、これはタダの言い訳かもしません。
加えて、あまり出来がいいとも言えません。
それでもよろしこういう方は、
どうぞ……

Side 右

よく分からぬにけり、エクビクしていた青髪さんが
いつもテニシッパンに直ったので、回ることにした。
ところでも、青髪さんは一時間ぐらじしか居られないのと、
公園近くをすまし回るだけである。

「アラ、こえぱ、青髪さんと一緒に歩くのって、
私とあつた以来ですね……」

あの時はまだ混乱していて、青髪さんはいろいろ迷惑かけた覚え
がある……

青髪さんは会わなかつたりまわになつていたやう。

「アハやね、あの時のコウサチさんは、
子犬みたいで可愛かったわ。
もちろん、今もとても可愛いしこどもー。」

「はは、あつがどうぞおまか……」

すこし苦笑いしてしまつた。

……あまり“可愛い”って言われても、嬉しくないな
やつぱり元男だからかな?
……えつと、適当に回ろうかな?

すこし苦笑いしてたな

はつもしさ、ボクの事……気持ち悪いと思つたんかな。
いや、でも、コウちゃんがそんなこと思つ子とは思へんし。
うふ、やうやな。そんなこと思つてないやうしね……

うん、うん！間違こあらへん！

「…やうに回るやうだね、おせじ」

「あ、え、はい……ありがとうございます」

ボクとコウちやんは「プラリ」回って、
出店や見世物で楽しんでいたんだ。

暑いんで、ボクのとコウちやんのソフトクリームを買ひに行つて、
その帰りなんやで。

暑れでまつとしむおるコウちやんが、帰つてきておるボクを見て、
笑顔で出迎えてくれた……その笑顔で一週間幸せに過りやるわ～。
～さみがせに～

「すみません……本当にたら、私がお返しをすまはずなの……」

ボクがソフトクリームを手渡したら、
なぜか申し訳なさそうに、そつ謝つた……

「なんで謝る必要があるん? ボクが好きで買つときのんやつ……
ボクはコウちやんが可愛く食べてくれ

たら、嬉しこんなやで～!!

～ひほり、溶けてしまひやん、せやへ食べ

よひー。」

ボクがそう言つたら、やうですぬと言つて、
嬉しそうにソフトクリームを“舐めた”。

実に良い食べ方やと思つわ～……うん、マジでここと思つ。
溶けて指につかなこよひにするため、回しながら食べてこべコウ
ちやん……

だが、どつとつ舐ひつこてしまつて、先についてしまつた指を舐
めていく。

その場面にボクは、自分が持つているソフトクリームが溶けはじ
めてこるひとこづくべことができんやつた……

ずっと北川ちゅあんを見ているボクのことが变成了たんやうつか、頭の上に“？”マークをつける感じで、

「どうしたんですか……あ、もしかして顔についてしまってますか？……うわ～、いい年して、恥ずかしいかも。」

顔を真赤にさせながら、腕で顔を拭いていく。
ちがうんや、北川ちゅあん……

そんなことをしたら、今の可愛い場面を止めてしまうかもしね
へん……
ボクにはそんなことができへんのやー

「多分、これでいいかな？どうですか、まだついてますか？」

……あ、ソフトクリーム、溶けてますよー！
あーあ、手につこちゅあつてますよ……

?……本当にどうかしたんですか？

あ、もしかして熱中症とかですか！？

あ、えっと、青髪さん、大丈夫ですか！？
ええと、えっと……

なんか、ぼうとしている間に、なんか勘違いされてしまつたみたいや……

今にも泣きそうな顔をしていて、可愛らしげ
これ以上はだめやな……ボクも耐えられへんわ、精神面が……

「大丈夫やで、北川ちゅあんの可愛らしさが日に離されんかっただけやー

なんてな……って、ソフトクリーム溶けている
！？こいつの間に！？

「ウちゃん！ 手、洗つてくるわ！」

「あ、安心しました……こつてらっしゃい」

本当、いい子だわ。

「すみません、なんか殆ど買つてもらつてしまつて……」

↳

「うん? 仮りせんでいいやで?

ボクはユウちゃんの笑顔が、もつとも嬉しいやか

۱۵۰

ユウちゃんの笑顔を見ていると、

日々の何処かのフラグメーカーさんに対して、

姉の心とか、汽車が何でいいのかを感じたら、これだつたら、一ヶ月は持つやうな。

だが、

残念ながら、ボクには競技があるんや……
こもえセンセーのための戦いがあるんやー

「じゃあ、そろそろ競技があるかい、
ほな、バイバイ～！」

「はー、よかつたらまた一緒に……」

「わちやんも楽しんでくれたようすで、良かったわ……
やっぱ、もつょっと西つてよかつたかも。」

……いや、別に本気で、競技をすり抜かそいつとか、
思つておらへんで……、つん。

Side end

「うへん、これからどうしよう……帰らつかな？」

どうせやることないし。

あ……“妹達”にお土産でも買つてこようかな？
今日、確かに出ないつて言つていた気がする。
何が好きかな？

あまいもの……りんご飴？りんご飴つて、
熱で溶けたりするのかな……どうだつたけ？

「まあ、適当に買つていこうかな……

髪留めとかがいいのかな？」

俺は道を引き返すために、後ろを向いて歩き出しあつとしたが、
誰かにぶつかった……

「わ！？」

ぶつかつた衝撃でそのまま後ろに落ちていく……
下はコンクリート……このままだったら、絶対痛い！
どうしよう！？
もう、田を瞑るしかなかつた……

と、思つていたが、

「おつと……大丈夫?」

落下が止まつた……どうやら 相手の人が受け止めてくれたようだ。

助かつた、死にはしないと思つけど痛いのはいやだからね。

「す、すみません。ありがとうございます!」

俺はそのまま体勢を正して、頭を下げて謝つてから、助けてくれたお礼を言った。

「いやいや、俺も悪かつたから……」

男の人にようだ……でも、この声どこかで聞き覚えがある。
どこだっだけ、以前、ずっと聞いていた気がする声。
もしかして、知り合い?

俺がそつと……

顔を持ち上げていく。

相手の顔を見て、もう一度だけお礼を言おつと思つて、

俺は、ちゃんと相手の顔をみた……

「え……？」

その顔は
以前の俺。

高橋 優の顔をしていた……

「どうかした?」

その顔は、とても笑顔だった。

S i d e e n d

どうでしたでしょうか？

今回、ある意味初登場の『高橋 優』です。

実はこの章は、彼のためにと言つても、間違いではありません。

あと、

皆様、8月1日18時5分現在、お気に入り登録102件、
誠にありがとうございます。

まさか、100件を超えるとは思つていなくて……
皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。

この気持ちを心に持つて、完結を目指し頑張つてこようと思つます。
さて、100件越えということです、
ここまひとつ、100件越え企画といつ感じで、

皆様から「コウと多分会うこともないだろ」と考へられる
キャラとの組み合わせなどを募集したいと思つります。
可能な限り書かせていただきます。

……実を言つと、私は20巻までしか買つていません。
ところで、20巻以上のキャラの組み合わせは、
申し訳ないのですがお断りさせていただきます。
すみません。

皆様からの応募、お待ちしております。

ご感想、ご指摘、お待ちしております。

Side ユウ

『俺』がいる……

『俺』は、人懐っこくてやわらかい笑顔で俺を見ている。いつもこんな顔をしていたのか？

「……ねえ、君？本当に大丈夫？」

顔が真っ青だよ？」

彼は、すこし心配そうに言ひ。

その顔は、変わらずやわらかい笑顔をしている。

恐怖感をわかせないためなのだろうか……

それともコレが普通なのか？

あ、返事しないと

「あ、えっと……大丈夫」

ついつい敬語忘れていたけど、いいよね？

「うーん、ちょっと心配だなー。

……よし、お兄さんがそばに居つといつー。

……え、俺ってこんな性格だつたけ?

それは置いといて、

『俺』だからって、迷惑かけちゃいけないだろ? な……
断つところ。

「大丈夫です。だから、いいですよ?」

なるべく元気そうに笑顔を作る。

だけど、彼は

「いいからいいから、ね?」

笑顔のまま、俺の手を引いて歩き出す。
うわあ、ありがた迷惑つて言葉を知らないのか『俺』……

着いた先は、今日一日目のファミレス……
来る間に思考も落ち着いたようだ。

「ハーハーハ～

『俺』こと、高橋 優は、店員さんに注文を頼む……
注文を聞いた店員さんが去つていってから、彼が話しかけてくる。

「うん、体調よくなつたようだね。良かつた良かつた

心からそう思つてゐるようだ……

いい人だな』『俺』

身も知らずの俺に対し、ここまで優しくするんだから……
……なんで自画自賛してゐんだろうか俺。

あ、そういうば……

『俺』は、こんな暑い日なのにスーツを着てゐる。
暑くないのかな？

「あの……もしかして“外”から来た人ですか？」

だつて学生なら、体操服を着てゐるはずだ……
スーツが体操服つていう可能性なんてないし……

「うん？……うん、そうだよ？友達が学園都市の学生だから、特別に招待されただよ？」

あれ？仕事じゃないのか？
なら、なんでだろう

「じゃあ、なんでスースなんですか？」

暑いんじゃ……」

こんな猛暑じゃ、倒れちやう。

「うーんとね、趣味だよ趣味」

笑つて答える彼……

趣味なら暑さにこも耐えれるといつことか……

と話している間にコーラが一つ来た。
俺は来たコーラをストローで飲む……

「うーん、可愛い飲み方するね～。

俺なんて、ストロー使わないでそのまま飲んじゃうの」「……

あれ？俺、そんな飲み方してたつけな？
……別の世界だから、俺が知らないことがあつたりしたんだろうか？

ていうか、また可愛いか……
苦手なんだけどな、言われるのは……

「あれ？ “可愛い”って言われるの、嫌だった？」

『俺』が残念そうに言つてる
俺、いやな顔していたのかも……

「い、いえ。嬉しいですよーはー！」

この世界の俺だからって、迷惑かけちゃいけないだらう。
最近、借りばかり作つてる気がする。

「もう…なりいつけ……あ？」

どうかしたんだらう？

？

「……暇なうれ、一緒に回らなー？」

俺、暇だから
「むうかな…

どうしようかな…

……まだ病院の監にお産買つ時間があるし、
回らうかな…

「えつと、私でよければ……」

「もうーありがと、良かつた。ねえ」

ずっと笑顔だな。

こんなに二度三度していたかな？

「じゃあ、二ラーブ飲み終わつたら、こいつか？」

一時間ぐらじそこりくんを回つて、
食べたり、遊んだりといろいろした。

「ねえ、楽しい？」

「？…楽しいですよ」

彼が俺に対して、そう問ひので
普通に頷いた。

急に「び」したのかな?

まあか……面白くなかった!?

「あ、えーと、えつと、樂しくなかつたですか!-?」

「……はは、樂しそよ」

よかつた。

ただの面白満足だつたら、びしきよしきとかと思つてた。

「あ」

急に思つ出したよつて、彼は声を発した。

「ねえ、面白こと」を友達から聞いたんだけど、

一緒に来る?」

面白こと?」

「いらっしゃるのかな?

行ってみようかな?

でも、迷惑じやないかな。

「迷惑でなければ……」

「ううん、せんせんOK!-!」

よかつた、じやあ行ひつかな。

「じやあ、よろしくお願ひしますね」

彼が書つた“面田いとこ”に附づけの途中、
聞きたい事を聞いた。

「あの、兄弟とかいますか?」

聞きたかったことの中で
一番大きかったのがコレ。
美晴が元気なのかどうか……

「……、くるよ。一人」

あれ？なんか違和感？

……氣のせいだらうな。

「どんな子なんですか？」

「……小学生の時は、とても無垢で可愛らしかったけど、中学生になつてから、すこしだけつるべくなつた。

「でも、可愛いよ」

「わ、シスコンへ。

……って、彼をシスコンって言つたら、俺もシスコンか。

「もうすぐだよ

もう言つ『俺』の後について行く。

「近道でも通りてるんですか？」
「近道でも通りてるんですか？」
「うん？ そうだよ」

近道か～、なら仕方ないよね。
と、思つていたら
急に彼がこちらを向いた……

「ちょっと待つて……あつてるか確かめる」

彼はそう言つてから、今来た道を通りていいく……

さて、どうしようかな……
ていうか、いつ帰るうかな?
早く帰らないといけないし……
あ、そういえば、
最近来た打ち止めちゃんが行きたがつっていたな～、
お土産でも買ってこようかな?
何があるかな?
食べ物は腐りそうだし……
やっぱり髪飾りとかがいいかな?
あはは、喜ぶ姿が目に浮かぶな～

なにを言つてるの？

なんだろコレ？

それは突然だつた。

首に何かが当たられてる感覺……

「……あれ？効かなかつた。

あ、そつか電撃使いだから効かないんだつた。
ミスマス」

「あ、ビックリした？」

驚いたでしょう？

でも、スタンガン効かないなんて、聞いたことないな

まあ、学校なんて行つた事ないから当たり前だけね」

「ス、スタンガン？」

「そう、スタンガンスタンガン。

結構強く設定してあるやつなんだよ、これ」

「な……んで？」

なんで『俺』が？

「あー、言ひてなかつたね……」

「え、

「俺は学園都市のフリーの暗部
君を捕獲しにきました。 高橋 優。

「はいよひじくね、コウちゃん?」

笑顔で言った。

俺はその笑顔で、一方通行を思い出した……
一方通行の恐ろしい笑顔じゃないのに……

あの日のような恐怖がたくさん湧いた。

6話 高橋 優（後書き）

“どうでしたでしょうか？”

“感想、”指摘お待ちしております。

7話 笑顔（前書き）

大変長い間、更新を怠つてしまい、
すいませんでした。

最近は資格の補習やテスト勉強などで、
家に帰宅するのも遅くなってしまつていて、
土日にも学校があり、頭も体も疲れてしまつていました
まあ、こんなのは言い訳と同じですけど。
こんなダメでど素人が書くのお話でよろしい方は、
どうぞ……

7話 笑顔

Side ユウ

「あ……あ、嫌！」

俺の体に『あの日』の恐怖が駆け巡った瞬間、
彼から逃げるよつに身を翻して、走った……

(何だ、あの笑顔？)

最初の笑顔と変わらないはずなのに

今さつきだけ、あいつ……一方通行と同じ雰囲気がした()

一方通行は、

まるで狂ったような、頭のネジが外れてしまったような……そんな
感じだった。

それがなぜか『高橋 優』にも同じような雰囲気があの笑顔から
湧き出た。

怖い、怖い、怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖
い……

あんなの俺じゃない……
一体何がどうなっているんだ。

全力で走りながらも、一瞬だけ後ろを見た。
彼は俺が逃げたことに焦った様子を見せせず、

変わらない雰囲気でこちらへと歩いてきていた様子が見えた……
俺が一回後ろを向いたのに気がついて、
すこし困ったような顔でポツリと言った。

「あ～、『めんね……

もう一つ黙つてたことがあったよ。

ここから先、行き止まりなんだよね」

「えつ？」

行き止まり……

その言葉に俺は、足を止めてしまった。

驚きと絶望を感じながら……

それが顔に出でていたのだろう、

彼は、俺の表情を見て頭を搔きながら嫌な顔で説明を始めた。

「えつとね、ここからだとこりは一箇所だけあるんだけどね。
まあ、俺が持ってきた車がそこに止めてあるからさー……

『めんね、なんか期待させたみたいで』

絶体絶命……

今の状況にこの言葉が合っているのかもしれない。

もし捕まつたらどうなるのだろうか？

その先には、何が待っているのだろうか？

そのまま殺される？

いやだ、なんで俺ばっかりこんな田に合わないといけないんだ。
こんなところで死ぬ？

『この子』の分まで生きようとしているのに？

また、あんな真っ暗でなにも見えないあの世界にいくのか？

そう思つた瞬間、

俺は『高橋 優』の方へと向かっていこう……

「えー? ちよつと待つでよ。」

突然走つてくる俺に対し、

好都合だ。

「それで電撃を至近距離で出せば、
気絶や驚くことひとつなく、隙を作れる」事ができるんだから。

「わああああー！」

俺は『高橋 優』を殺す勢いで迫って、一方通行の時と同じように右手を突き出した。

「あー、もうビックリだよ本当……
まあ、ドンマイ?」

君の抵抗は始まつてからもう終わつてたんだよ

『高橋 優』は俺が突き出した腕を掴み、
やわらかい笑顔を向けて言つた。

分からぬ……
俺は電撃を出すと考えたのに、
俺の腕から何も出ない……

「出る、出る、出るよーー?」

「無理だよ？」

俺の『能力停止』で一時的に君の超能力を使えなくしたからね。
……君のレベルじゃ、覆すこともできない」

あつさりと答える『高橋 優』の言葉は、
俺には、死刑と同等だった。

頼むから出てくれよ……

そう望んでも、願つても、何も出ない。

『俺が何をしたって、何も変わらない。』

その事実だけが私の体を包み、
そして、

俺は逃げるのを諦めてしまった。
体は震えるだけで、力が入らない……もう立つていいことだって
無理だ。

でも、死にたくない、死にたくないんだよ……

「嫌だ……嫌だよ……

なんで俺なんかがこんな目にあわなきやならないんだよ

「

「そうだね。

君は望んで生まれてきたのでもないし、
君が何か悪いことをしたのでもないね……

大人们が『都合が悪い』や、

イかれた研究者『面白そう』と言つて、
自分たちの都合を押し付けているだけだよ。

僕もそうさ……

生きるために君を犠牲にする『悪人』であり、
彼らとまったく同じ『同類』さ。

だから、君は僕を恨んでもいいだよ?」

思考が停止し、体が動かず、ただ『死にたくない』と望む俺に、
さも当たり前のよう言つ彼は、またやわらかい笑顔をしていた

⋮

s i d e e n d

7話 笑顔（後書き）

どうでしたでしょうか？

久しぶりに書いたためか、なかなかうまく書けなかつたので、表現などおかしいこともあるかもしれませんが、その点などをご指摘くださいると嬉しいです。

ご感想、ご指摘をお待ちしております。

最近、髪が坊主になりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2298s/>

とある妹達の憑依物語

2011年11月17日19時12分発行